



ハイライト:

- ・ 第 27 回 JEA 総会報告
- ・ 心のオアシストリート、神学・宣教シンポジウム
- ・ 初の日本青年伝道会議開催

第 6 回日本伝道会議は神戸で

● 2009 年 9 月、札幌において、「危機の時代の宣教協力もっと広く、もっと深く」とのテーマをかねて第 5 回日本伝道会議 (JCE5) が開催されました。私たちはその決意を「札幌宣言」として採択し、その宣言の最後に「私たちは、この危機の時代にこそ神の御力に頼り、もっと広く、



JEA 理事・JCE6 実行委員会
プログラム局長 小平牧生

もっと深く、新しい日本と教会を拓くために宣教協力を進めます。私たちは主の日を待ち望みつつ、2016 年の第 6 回日本伝道会議 (JCE6) に向けて、それぞれの分野で具体的な取り組みを進めます」と結び、主の聖餐にともにあずかってそれぞれの場に遣わされたのです（参考「札幌宣言ー 21 世紀における教会のチャレンジ」）。

● 第 5 回日本伝道会議においては、既に進められていた宣教協力の分野を 15 の「プロジェクト」として取り組みました。すべての「プロジェクト」がそのままの形で継続しているわけではありませんが、JEA の各専門委員会や関係諸団体、あるいはそこから始まった各種ネットワークなどによって、宣教協力の業が進められています。また、伝道会議後は 2010 年に名古屋、2009 年に青森と秋田、そして今年 2012 年は仙台において、毎年「宣教フォーラム」が開催され、各地域における具体的な宣教協力についての討議が重ねられています。そのような継続的なプログラムによっ

て、私たちの交わりが深められ、強められ、広められていることは感謝なことです。特に今年 9 月、札幌における青年伝道プロジェクトから生まれた「日本青年伝道会議」が東京で行われました。青年宣教の使命を共有する者たちがともに集まり、次世代を担うリーダーや青年たちが主によってビジョンを分かち合い、具体的な協力と取り組みが生みだされる会議となったことを感謝しています。（報告は 7 ページ参照）

● さて、京都で開催された第 1 回日本伝道会議において「日本をキリストへ」との祈りをあわせて以来、日本伝道会議は京都、塩原、沖縄、そして札幌において開催されてきました。それぞれの会議において、私たちは教会の公同性を確認し、教会にゆだねられた福音宣教の使命と宣教協力についての具体的なあり方を討議しつつ、今日にいたっています。私たちは、唯一の救い主であるイエス・キリストの福音を、この国をはじめすべての国の人々に証しするために、さらなる宣教協力の姿を求めていかなければなりません。この終末の時代において、私たちはそれぞれの歩みとあり方を受けとめ直し、互いに愛し合いながら、聖霊によって一つとされていくことでしょう。日本伝道会議の開催は、そのための大切な機会であると思います。

● 今年 6 月の JEA 総会において、第 6 回日本伝道会議を 2016 年 9 月 27 日～30 日に神戸市で開催することが決議されました。神戸は、日本のキリスト教史において大切な役割を果たしてきた都市です。受け皿となる教会の協力態勢があり、現在もいくつもの神学校やミッションスクールがあります。訪れる人々に魅力的な街であり、交通の利便性もよく、会場となる神戸コンベンションセンターは国際会議場

目次

《巻頭言》	1
JEA 活動報告	2
流れのほとり 心のオアシストリート	3-4
国際神学シンポジウム	5
宣教シンポジウム	6
日本青年伝道会議開催	7
総務局報告	8

JEA 活動報告 (AEA, WEA 関連含む)

■第27回日本福音同盟 (JEA) 総会報告

2012年6月4日(月)～6日(水)、静岡県掛川市にある「ヤマハリゾート・つま恋」で、第27回 JEA 総会が開催された。JEA 加盟の53会員(教団・教会)と43協力会員(宣教団体)から約130名(代議員・オブザーバー)が出席し、2012年度 JEA 事業計画として、①東日本大震災からの救援・復興を支援し、次の災害に備える取り組み、②第6回日本伝道会議 (JCE6) に向けた取り組み、③アジアおよび世界の教会との連帯と具体的な協力の業、④日本青年伝道会議の開催、などについて協議・決定した。(詳細は JEA ウェブサイト <http://jeanet.org/> の「第27回 JEA 総会報告」の「2012年度 JEA 事業計画」を参照。)

1. 東日本大震災からの救援・復興支援を継続し、次の災害に備える

一日目の夜は、『東日本大震災から考える宣教/教会協力』と題して、木田恵嗣師(福島県キリスト教連絡会委員長)、阿部信夫師(相模原教会ネットワーク災害支援プロジェクト事務局長)、石川一由紀師(救世軍震災支援事務局長)の発題を聴き、震災からの救援・復興支援の継続と、今後の災害への備えを通しての宣教/教会協力のために祈りを合わせた。

2. 次世代のリーダー育成のために

二日目の夜は、『次世代育成のビジョンと教会形成』について、JEA 青年委員の西村敬憲師(西大寺キリスト教会牧師、サムエル国際キリスト教学園校長)の講演があり、今秋、JEA 青年委員会主催で開催された日本青年伝道会議 (NSD) の説明とアピールがあった。次世代を担う若者たちが福音によって生かされ、キリストの愛を伝える使者として遣わされていくために共に祈り協力していきたい。

3. 第6回日本伝道会議に向けて

今総会で2016年に開催予定の第6回日本伝道会議 (JCE6) の開催地を神戸と決定した。二日目午後『JCE6に向けて、日本宣教の課題』をテーマに、各専門委員会からの発題と、小グループに分かれてのディスカッションを行い、その内容を7月に発足した JCE6 実行委員会(実行委員長: 竿代照夫師 [イムマヌエル]、プログラム局長: 小平牧生師 [兄弟団]、事務局長: 畑中洋人師 [同盟基督])に引き継いだ。

4. 女性の視点と賜物を取り入れる

JCE5 の宣教における女性の働きプロジェ

クトの取り組みから、JEA 組織内にできるだけ女性の視点と賜物を取り入れていくことを目指す。今回の総会議長団では、女性として初めて丸山園子師が副議長として奉仕された。

5. 原発問題への取り組みの呼びかけ

総会議事とは別に、理事長から「東日本大震災から一年を経ての理事長所感」が発表された(内容は JEA ウェブサイト <http://jeanet.org/> を参照)。これは福島第一原子力発電所の事故を受けて、原発問題に対する聖書信仰に立つ福音派としての取り組みの必要性を呼びかけたもの。神学委員会が2013年の総会に向けてブックレット発行を目指している。

■アジア福音同盟 (AEA) 総会出席

2012年4月16日～18日、インド国ニューデリーにて、アジア福音同盟 (AEA) 総会が行われ、JEA 国際渉外室長であり、AEA 実行委員である植木英次師が出席した。

世界宣教におけるアジア地域の重要性は増しており、アジアにおける福音的諸教会の連帯と協力関係を、さらに強めていく必要が確認された。特に急速に進むイスラム化への対応は各国で急務となっている。

■災害対応チャプレン・プログラム

第1回フォーラム開催

2012年7月5日(木)～6日(金)、お茶の水クリスチャンセンターにて、災害対応チャプレン・プログラム第1回フォーラムが開催され、被災地や東海地区なども含め約50名が参加した。米国救世軍災害支援コーディネーターで、9.11 同時多発テロ後の被害者カウンセリングなどの実績をもつケビン・エラズ博士を招き、災害時の情緒的・霊的ケアについて深く学ぶ時を持った。

参加者からは、「この一年間、救援活動で経験してきたことを体系的に整理できた」、「もっと早くこの学びをしたかった」、「燃え尽きを経験した。援助する側のケアについても、もっと学びたい」などの声があがった。エラズ博士のプログラムは、国連の関連機関でも採用されており、キリスト教外からの評価も高い。今後、テキストの翻訳やチャプレン・プログラムを活かすための災害対応ネットワーク作りを並行して進め、来年2月4日～6日に災害対応チャプレン・プログラム日本語版の第1回トレーニングを行う予定。

【8 ページに関連記事】



安藤能成理事長、木田恵嗣師、阿部信夫師、石川一由紀師



第6回日本伝道会議 (JCE6) 実行委員会の小平牧生師、畑中洋人師、竿代照夫師



次世代育成について講演した西村敬憲師と青年委員会メンバーなど



インド国ニューデリーで開かれたアジア福音同盟 (AEA) 総会参加者



災害時の情緒的・霊的ケアについて語る米国救世軍のケビン・エラズ博士

この川の流れていく所はすべてのものが生きる

JEA 女性委員会委員長 梅田登志枝

さる6月、福島県猪苗代で開催された、第10回「心のオアシス リトリート」は溢れる恵みのうちに終了しました。教団、教派の枠を超えてともに賛美し、祈り、涙し、そして笑いました。キリストの愛と赦しによって一つとされた喜びは、まさに天国の前味わいの様でした。それはまた互いの信仰生涯に希望をもたらすものでした。

預言者エゼキエルは、祖国イスラエルの復興、新しい世界の希望の幻として、神殿の敷居の下から流れ出る水を見せられました。

* 祝福をもたらす流れ

「この川が流れて行く所はどこでも、そこに群がるあらゆる生物は生き、非常に多くの魚がいるようになる。この水が入ると、その水が良くなるからである。この川が入る所では、すべてのものが生きる。」(エゼキエル 47:9)

その流れは、乾ききったアラバの地を潤し、生命力がない死海に命を与えて、豊かな祝福をもたらすというものでした。

* 聖所を源とする流れ

「その水が聖所から流れ出ているからである。」(47:12)

この命の流れは、神様の臨在される聖所から来ていました。源が聖なる神様ご自身にあるからこそすべてが生かされました。

私たちお互い、この命の流れのほとりから離れずに、しっかりと根を張り続ける限り、生かされて結実ある生涯が約束されていると



はなんと幸いなことでしょうか。命の源が神様にある限り、私たち自身が生かされるだけでなく、私たちがかわるすべてにもその恵みは及ぶのです。

この7月から前委員長の丸山園子先生より、私が女性委員会の責任を引き継ぐことになりました。これまで同様、この時代に生かされているクリスチャン女性たちがそれぞれの立場で、生き生きと主に従い仕えていくことを願っています。そのためにもお互いが抱える現実の問題にも目を向けながら、主のみこころに沿った解決とともに探り、祈り求めてまいります。そして何よりも私たちを生かす源なる神様との関係に最大の関心をもちつつ、活動を進めていこうと願っています。今後ともお祈りとご協力をよろしくお願いいたします。

女性の学び『性差によるのか賜物によるのか』No.13 ~ 応答の実行 [2]

B. その幻(ビジョン)に関連する信条を明文化する。

幻(ビジョン)がより聖書的な方向に移動する過程は、それらに関連する信条を箇条書きにして、それらが聖書の教えと一貫性があり、両立するか否かを決定することです。

1. 論争を呼ぶ定義に関する考え方

リーダーシップの神学が、階級制度や権威ではなく、キリストのサーバント・リーダーシップのモデルに基づいて発展されるなら、女性が神の召しに応じ、どのような働きにつくことにも、神学的な問題は生じません。もし主の働きが力ではなく奉仕として理解され、そして権威が人ではなく、みことばにあると認められるなら、解釈学的な問題は起らないでしょう。

かしら性の問題は「かしら」の一般的な意味をすべての聖書箇所を押しつけるのではなく、聖書箇所を文脈を見ることによって解決することができます。権威の問題は「オウテンティン」を「エクス

シア」ではないものとして理解するときには解決することができます。服従の問題は、みことばの中で教えられている相互の服従という理解と、賜物はすべての人によって用いられる共同体のモデルの理解によって解決します。

2. 聖書の権威に関連する考え方

聖書的に正当な権威の行使とは何でしょうか。権威の乱用はどのような時に起きるのでしょうか。

あるグループに属しているゆえに権威を与えられるような組織には、潜在的に権威の乱用があります。それに対する解決法は相互服従という聖書的な教えと、共同体の中における職務を決定するための賜物の使用です。真にクリスチャンの共同体においては男であれ、女であれ、究極の権威をもつべきではありません。なぜなら共同体の役割は神の御心を見極めることであり、神こそが究極の権威だからです。

3. 共同体に関連する考え方

神はご自身の民が模範的な共同体の中で生き、共同体を発展させ、共同体を作ることを意図しておられます。

・・・古い体質では、教会は人々を性別のゆえに差別していました。しかし、キリストの贖いの御業は、男と女の関係の基本的な原則として階級制度の役割から私たちを解放します。新約聖書は新しい創造の幻(ビジョン)に沿って生きるように命じています。このまぼろしはすべての人種、社会的立場、そして男女の間に完全に和解の日が来るのを待ち望みます。・・・

この共同体が健康的なものであるためには、そこには一致と奉仕がなければなりません。しばしばクリスチャンの集まりは一致を強調するあまり、一致の目的を忘れることがあります。他方、主の働きに集中するあまり、一致を保つことをおろそかにする人たちがいます。一致と主の働きの両方を推進する一つの大切な要因は説明責任です。

★『性差によるのか、賜物によるのか』(WEA 女性委員会出版)の全訳および資料と JEA 女性委員会による考察を JEA ウェブサイト (<http://jeanet.org/>) の女性委員会ページで公開しています。ご活用ください。

「生ける望み」を確認したリトリート

前女性委員長 丸山園子

今回のリトリートは、風評被害のために宿泊客が減少している福島を支援したいと、猪苗代に集まりました。参加者94人。1歳から86歳という幅広い年齢層、男性参加者も増えました。被災地からの参加者も、阪神大震災を経験した関西からの参加者もあり、互いの励ましとなりました。

佐藤彰先生は、「震災で何を見たか」―震災当日から現在に至るまでの経過を含め、3回に分けて講演してくださいました。痛みの真中に神様がいてくださったという兄弟姉妹から寄せられた報告に、真実な神様の前で頭を垂れました。震災は、「絆」を生む一方で壁を崩した、とのこと。教派の壁が壊れて協力体制が生まれました。教会と地域の壁が壊れて地域に受け入れられました。日本と世界の壁が壊れて祈りと支援が広がっています。問われたのは、この世にあって何を築こうとしているのか、真の教会・神の国とは何か、ということ。そして、被災地に広がる現状格差（回復している人と回復に向かえない人）・境界格差（被災地とそうでない地域）の複雑な痛みの現状。この現状を踏まえつつ佐藤先生は、「困難の中では、すべてを理解することはできない。今はプロセス。神様の時がくればわかる。確かなことは、聖書の方程式。希望はインスタントには出てこない。苦難の先に希望が見える。そして、修羅場をどう生きたかがその人の底力となる。」と語ってください、心奮われました。

共に祈るべく、3人の女性から被災体験の分かち合いをいただきました。福島第一聖書バプテスト教会牧師夫人佐藤ちえ子氏。放射能・流浪という未経験の出来事を探り進んできた、そのすべてが主のみ手の中に守られていたことを分かち合ってくださいました。石岡キリスト教会牧師松

下潤子師。多くの支援の感謝とともに、外見では発見できなかった教会土台が壊れていたことから、人生の土台・信仰の土台は大丈夫ですか、と問われました。勿来キリスト教会牧師夫人住吉美和子師。地域に留まり痛みを共にする中で、一つ一つできることをして今のミニストリーがある、と励ましてくださいました。

分科会は、フリータイムと並行で7つ行いました。①「被災地支援の現状」高木克己氏（ワールド・ビジョン・ジャパン）②「女性のグッドエイジング」柏木道子氏③「子どもの自立」金本悟師④「ゴスペル・フラ」中野めい子師⑤「よりよい夫婦関係」ジョナサン・ベネディクト師（ファミリー・フォーラム）⑥「高齢者ケア Q&A」渡邊純子師⑦「弱さを抱える家族とともに」高森信子氏。限られた時間でしたが、具体的な示唆を得る学びとなりました。お部屋でゆっくりお交わりしていたり、猪苗代湖に出かけた方々もあり、それぞれ豊かな時を過ごしました。

快晴の猪苗代から、「生ける望みを抱いて」それぞれのもち場に戻っていきました。



「心のオアシス」リトリートに参加して

今回のリトリートの会場は、豪華で快適なホテル・リステル猪苗代でした。猪苗代は福島県内陸のとても美しい所です。最近「福島」と聞くと原発と放射能のことを思いがちですが、それが福島のすべてではありません！わたしはホテルの部屋からの広々とした眺めがとても好きでした。一湖や山々、水田、点在する村、花畑、そして青い空。温かく穏やかな三日間、まるでスイスにいるようでした。ドロテア先生とわたしは同室で、集会の合間にはコーヒーや紅茶、手作りのケーキを準備し配らせていただきました。おみやげの葉も、皆さんが喜んでくださいました。

ヨハネ 11:30～36 から丸山先生が語られた開会メッセージに、とても恵まれました。マリアと共に涙を流されたイエス様のお姿は、困難の中にある人々への深い愛を表しています。またイエス様は、人々が大きな困難の中でも神様の栄光を見ることができるようにと祈られました。佐藤彰牧師のメッセージは、昨年3月の大震災を経験した方々の悲しみと、また喜びに満ちた証言でいっぱい、大きな困難の中でも神様が働いておられること、そして神様は最悪の経験からさえも、新しく美しいことを創造してくださっていることを明らかに示してくれました。挑戦を受け、また励まされるメッセージでした。

リトリートはまさに「心のオアシス」であり、「生きる望みを抱」かせてくれるものでした。出席できたことを心から感謝しています。（クンツ・プリスキラ）



リトリート委員会では、東日本大震災の被災地、現地の教会に思いを馳せつつリトリート開催地の決定等準備が進められました。受付の時期を迎え、多くの参加者をと祈りつつも、福島県ということで避けられることはないか、あるいは震災から1年以上経過し風化していないか懸念がよぎりま

した。しかし私の懸念はみごとに覆され100名に届きそうな登録に心から感謝しました。

私はこのリトリートが被災した教会になんらかの励ましになればと臨みましたが、講師の佐藤彰先生と被災地の主の働き人である夫人たちの生のお話を聞き、想像を絶する困難な状況の中にも共にいて下さる主の真実を知らされ逆に励まされました。今後も主にあつて息長い触れ合いを持ちつつ、共に生かされることを願い祈っています。（阿部恵子）

第10回のリトリートは「生ける望みを抱いて」のテーマで、ぜひ被災地の福島で開催したいと委員会と話し合いました。講師に佐藤彰先生をお迎えし、3回にわたる講演「震災で何を見たか」を通して、あの東日本大震災の日に何が起り、人々は、教会は、何とどう向き合わされたのかを聴きました。講演の中で心に残った先生の言葉は、

1. 苦しみの向こうにこそ、キリストが見える。（詩編 119:71・イザヤ 11:1）
2. 人生の物の見方が震災を通して変わった
3. 目標が果たせなくても（福島に帰れても帰れなくても）いいのだ。
4. 本当の命の意味を知った
5. 忍耐を通して品性がつくれる

最後に先生が祈りの中で「全世界の主、人生の主」と祈られた言葉に、震災を通られた方の真の告白であると感じました。また佐藤先生の他に被災地の3人の女性が、震災の時とその後の心の痛みやキズを分かち合ってくださいましたが、それぞれ大変な状況の中、ご自分も被災されているのに自分たちのことは後回しにされて、人々の生活と命に向き合って教会に仕えてこられた姿に感動しました。

生ける望みを主に抱いて、主から生きる望みをいただかないと、人は歩めないのだと思いました。福音の力を信じて語っていかなければと思われています。（三橋香代子）



東日本大震災をめぐる二つの国際神学シンポジウム

JEA 神学委員長 山口陽一

東日本大震災についての神学的考察がさまざま試みられる中、二つの取り組みを紹介したい。一つは、フラー神学校の協力と東日本大震災救援キリスト者連絡会 (DRCnet)、聖学院大学総合研究所、東京基督教大学の主催により、3月23日に女子聖学院で行われた国際神学シンポジウム「いかにしてもう一度立ち上がるか—これからの100年を見据えて—」。第二は、ソウルの総神大学校平生教育院、在日韓国人宣教師、東京基督教大学の主催で、7月4日に東京基督教大学で行われた合同シンポジウム「東日本大震災と日韓の教会—救援と復興のヴィジョン—」である。

第一の企画の推進役は聖学院の藤原淳賀氏である。同氏は「神の時を捉える—神のわざへの参与」と題して基調講演し、大震災を日本と神の民にととの「時」(カイロス)と捉え、神は「贖いの苦難の働きに参与するように招いていられる」と呼びかけた。そのためには「苦難」の積極的理解を重視し、教派の壁とナショナリズムを越えた教会となる必要があるとし、100年後の日本と教会のために協力を進めましようと呼びかけた。

ホァン・マルティネス氏の講演「大災害時におけるキリスト教的応答—教会史から学ぶ」は、410年のローマ陥落、1666年のロンドン火災、2010年のハイチ大地震におけるキリスト教的応答を概観するスケールの大きなもの。「神はどなたであり、この世界で人間との関わりの中でどのように働いておられるかを神学する」、3・11以後のパラダイム転換の兆しの中、日本社会においてその役割を再考する日本の教会と共に歩みたいと語られた。

私は「日本キリスト教史における東北」と題し、キリシタン時代以来の東北のキリスト教の独自性と近代日本における東北の位置にふれ、脱原発により3・11が世界史の画期となるような復興、国民統合への新たな動きへの警戒、東北の教会と連帯する日本の教会の再生を語った。

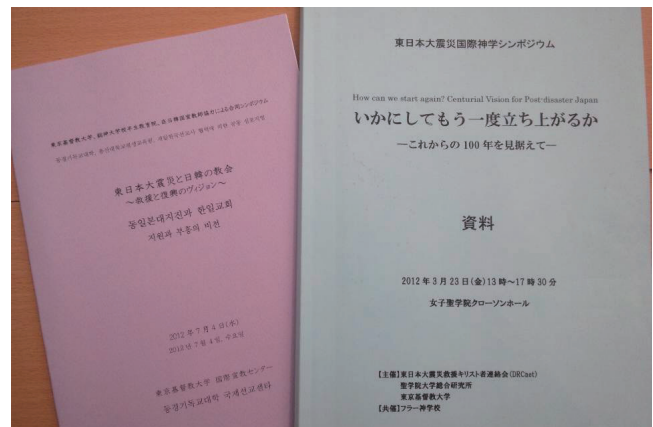
G.H. スタッセン氏は「同情する苦しみ、また不正義との対決としての十字架」と題して、マルコ福音書から「同情をもって」「中に入る」イエスを徹底して描き出した。そして「マルコ福音書と、イエスがお上で苦しんで死んだ十字架とは、私たちすべてに対して、福島原発事故の災害に苦しむ人々の苦しみの中に入るように呼びかける招きである」と締めくくった。さらに広島・長崎への原子爆弾投下について謝罪され、「私の母国には、イエスが十字架において私たちにお与えくださった、あの同情、対決、そして悔い改めへの招きが必要なのである」と語られた時、会場は深い感動に包まれた。

大木英夫氏は「神に迫られた改革：日本を神学する」において、ハンス・ホルバインの『墓に横たわるキリスト』を初めとする数々のシンボルにより「バルトの垂直次元の現在終末論から、今や二ーバーの水平次元に関わる歴史的社会的な神学へと新しい関わり、あるいは新しい関係づけをもたねばならなくなっているのではないか」と語られた。

次に、総神大との合同シンポジウムであるが、キリスト教倫理の宋浚仁氏は「福島原発事故を通してみた原子力エネルギーに関するキリスト教倫理的省察」という長論文を用意して丹念に原子力発電とその問題点を論じ、結論の「教会の責任と聖書的ビジョン」において韓国教会の発展至上主義を批判的に取り上げた。「成長至上主義のキーワードがあてはまるすべての制度的装置を探し出し、それを解体し、福島以後を省察した新しい模索をしなければならない。その初めの一步は成長主義を追求しない『小さい教会』の追求であろう。その次は社会の中で小さく貧困な人々を助けるための運動であろう。福島以後宣教の姿は成功を追求する神学や教会になってはならない。むしろ小さい人々の苦しみと悩みに耳を傾けて、巨大な発展至上主義によって差別を受ける個人と地域と社会のために献身するため自ら痛みと不便に忍耐する信仰から始まらなければならない」。これに対し東京基督教大学の稲垣久氏は、キリスト教倫理が親密圏から公共圏へ出て、非キリスト者との対話へと進むべきこと。Eco-justiceはecology-justiceであると同時にeconomy-justiceであるべきことを公共哲学の立場から応答した。歴史神学の徐要漢氏は「21世紀韓日両国の協力と今後の展望」と題して古代から現代までの日韓関係史を入念に語り竹島問題にまで及んだ。私は、日韓の教会が民族を越えて神の民の歴史を検証することで両国関係の改善を期したいと応答した。

日本同盟基督教団招待キリスト教会の趙南洙牧師は「東日本大震災と日韓宣教協力」と題して特別講演。3・11以降の韓国教会による救援と復興支援を紹介し、天に国籍をもつ者として日韓両国教会の和解と協力を力説した。参加者一同は、日本宣教の最前線に仕える韓国人牧師の言葉に共感し、主にある交わりと理解を深める良き時であった。

以上、二つの国際シンポジウムに関わって思うことは、東日本大震災と原発事故が世界の教会の神学的課題となっていることであり、翻って自省すれば世界の教会の今日的課題を日本の教会が如何に共有しているかということである。(前者の講演録は出版の予定。後者の講演録は残部あり、東京基督教大学HPを参照下さい。)



東日本大震災の救援・復興支援から学ぶ

JEA 宣教シンポジウム報告

JEA 宣教委員会 協力スタッフ 永井敏夫

2月6日(木)の午後都内で、JEA 宣教シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、宣教委員会が主催し、DRC ネットが後援をした企画で、約40名あまりの参加を得た。昨年10月に秋田で開催された「宣教フォーラム・秋田」での発表を受け、またこの秋に予定されている仙台での「宣教フォーラム・仙台」につなげていくためのシンポジウムであった。

第一部では、震災以後、精力的に救援・復興支援活動に関わっておられる三人の方たちからの発表をうかがった。

まず、森谷正志師は、仙台バプテスト神学校校長としてまた、南三陸町を支援するキリスト者ネットワークに関わっておられる立場から、「支援と宣教」というタイトルで発表された。教会が、地域社会に存在する本来の姿である「寄与、貢献する教会」になり、地域の必要に応じていく存在となることの大切さが語られた。ローマ時代の初代クリスチャンたちが、市民意識をもち、町の繁栄と福祉を求めて生きていたように、今日の教会もその地域にかかわり、キリスト者個々人が共同体の中で「寄与者・貢献者」というチャレンジがなされた。さらに、地域が教会の影響を受けていくように教会連合型ネットワークができ、教会が地域の繁栄を求めて活動していく中で、最終的には文化を変えるまでの影響を与える願いをもつことが語られた。



次に立った住吉英治師は、福島県キリスト教連絡会(FCC)の立ち上げに尽力し、いわきCERSネットを通して活動をしている。原発事故後に、「原発事故の所に取り残されている病気が弱い人々のために祈り、励ましてあげたい。」というイエスさまの声を聞き、ご夫妻で他地域への避難を思いとどまり、いわきの地域の人々と生き、物資の支援に携わってきたことが語られた。「宣教とは、その地の人々と「共に生きる」(共生)である。」を中心に、先生が歩みを紹介された。また、今後も継続して情報が交換されること、協力がなされるための体制作りが大切であると示唆をされた。

三番目に盛岡聖書バプテスト教会の近藤愛哉師が「岩手における宣教論」というタイトルで発表された。3.11いわて教会ネットワークの代表も務め、震災直後より内陸部から沿岸地域に支援をしている師は、「(やがての)宣教のための支援に非ず。支援＝宣教」と語り、支援者と被災者という関係から、「人と人」の関係で私たちが生きていくことの大切さを語った。どうした



らその地の人々の間で、キリスト者として生きること、仕えることができるのかを大切に、一人の赦された「罪人」としてそこに(被災地の人々に)赴き続けること、その地ならではの宣教論の構築の必要性を語ってくださった。



上記の発表の後、参加者がAからFの6つのグループに分かれ、各自の考え、思いを分かち合う時をもった。それぞれのグループで話された事項は多岐に渡るが、「これから」という視点で整理すると次のような項目が浮かび上がってきた。

- ・情報を共有する場、必要と供給のマッチング
- ・教会への支援のための長期的資金計画
- ・態度、言葉、行動の仕方での生き方を示す長期的視点
- ・従来の教会形成のあり方の再考(国内宣教師の発想など)
- ・諸教団・教会間、諸団体間で安心して話せる間柄、信頼関係作り
- ・「教会の役割とは?」「地域と宣教」などについての議論の積み重ね
- ・次のリーダーの育成と支援のあり方

今回のシンポジウムでは、復興支援アンケートの報告と分析の発表がなされた。これは、JEA加盟団体、協力会員への東日本大震災からの復興に向けた取り組みに関するもので、加盟団体17、協力会員10総計27による回答をまとめたものである。

アンケートの回答によると、来年、再来年まで取り組みを予定しているところが8、期間限定なしが5とあり、回答を寄せた半数の団体、会員が今後も継続した取り組みを考えていることが分かる。取り組みの内容は多岐にわたるが、今後の課題として、心のケア、ネットワークなどの関係作り、活動のための人材育成支援など、前述のグループ討議で出された課題に共通しているものが見られる。アンケートに記されていた「新たな東北宣教についてのプラン」「長期的視点での宣教の取り組み」「今後の大災害への備えの具体化」などは、2012年10月末に予定されている「宣教フォーラム・仙台」でも、またそれ以降の機会でも協議していくべき課題であると思われる。





初の日本青年伝道会議開催



力強く語る郷家一二三師

初の日本青年伝道会議 (NSD2012) が、2012 年 9 月 17 日 (月・祝) ～ 19 日 (水)、東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された。朝の聖書講演から、

バラエティーに富んだ 50 以上の分科会、フットサル大会に夜の青年大会と盛りだくさんのプログラムに、期間中全体で 700 人をこえる参加者が集い、青年宣教への情熱とチャレンジに満ちた三日間となった。

一日目、二日目朝の聖書講演で、郷家一二三師 (日本ホーリネス教団委員長、坂戸キリスト教会牧師) は、詩篇 130 篇 1 ～ 8 節、ローマ 7 章 24、25 節、使徒 8 章 26 ～ 40 節から「聖書から見る青年宣教」というテーマで語った。青年とは年齢ではなく、自分とは何者なのかを問い、人生の深い淵に直面する時期。そこで経験する孤独、不安、挫折、死、みじめさという深い淵のただ中で、主イエスに出会うチャンスがある。一人の青年の魂の叫びを聞き、その深い淵のそばに一緒に立ち続ける者になりたい。そしてそれは、わたしたちの力や方策ではなく、聖霊の導きによる。「青年だから青年に伝道できるのではない。聖霊に導かれて伝道しよう」と勧めた。

午後のプログラムは、一日目、二日目それぞれ 2 コマずつの分科会が用意された。一日目の 1 コマ目はフォーラムという企画で、「中学生・高校生伝道」、「社会人青年としてのビジョン」、「スポーツ伝道」、「帰国者と宣教」、各教団・教派の「青年担当者の集い」など、立場や働きに共通項がある者同士が集まり、情報交換と今



フットサル大会も行われた

後の連携・協力などについて話し合った。他のコマでは、「高校生限定 クリスマンデーティング男子編・女子編」、「コード弾きピアノ奏楽の実践」、「聖書的世界観に生きる一政治編、職業編」、「ネット、SNS の活

用と青年伝道」など多様な課題や方策について具体的に学ぶ機会が提供された。よい方法論があっても、よい仲間とネットワークがなければ実践できない。そのような意味で、今回の分科会は方策の紹介だけでなく、共に宣教を担うネットワークづくりを重視したことが特徴だった。

夜は青年大会が開催され、コンサドーレ札幌の応援ソングで注目されているクリスチャン・バンド「ナイト de ライト」も出演して大いに盛り



夜の青年大会には多くの青年たちが集まった

り上がった。一日目のメッセンジャーは小澤由紀恵師 (hi-b.a. 元スタッフ)。ルカ 19 章 1 ～ 10 節から「イエス様と同じ心で一人の青年のために泣ける者になりたい」と献身のチャレンジをした。二日目は、米内宏明師 (日本バプテスト教会連合理事長、国分寺バプテスト教会牧師、JCFN 理事長) が、ミカ書 6 章 8 節などから、「クリスチャンとは様々な区分を超えて他者のために本気で祝福を祈る者である」と定義し、「自分の居心地のよいところに留まるのではなく、主イエスのように他者のところに出て行って、現代の日本と世界を祝福する者となろう」と励ました。

三日目の聖書講演では、山口陽一師 (東京基督教大学大学院研究科委員長) が、「歴史から見る日本の青年宣教」と題して、明治初期のプロテスタント宣教とリバイバルの様子を取り上げ、「明治の教会は若者の教会であり、彼らは新しい時代を切り拓く情



青年たちの心に届くナイト de ライト

熱と行動力をもっていった」と語った。そして「日本の教会は内向きになるのではなく、グローバル化時代の IT 世代を意識的に迎え入れてほしい。青年には大志を抱いていただき、旧世代はそれをはね返すぐらい本物の信仰で聖書を読み、祈り、新しい時代を切り拓いていただきたい」と結んだ。

日本社会全体もキリスト教会も閉塞感に覆われる中、青年伝道という宣教の 1 ジャンルにとどまらず、日本のキリスト教会全体に福音によって切り拓かれる新しい時代の可能性と、取り組むべき課題、進むべき方向を示唆する会議であった。

(P.1 より続き)

と国際展示場を備えたすばらしい施設です。また、1995年の阪神淡路大震災によって大きな痛みを受けながらも、復興の道を歩みつつあるこの地で伝道会議を開催できることは、主の恵みであると思います。さらに昨年3月11日の東日本大震災を経験したことで、神戸で次回伝道会議を開催することの意義はより深まったのではないかと感じています。神戸の諸教会においても、このために祈りつつ協力態勢を造り上げてくださっています。

●今年7月に第6回日本伝道会議(JCE6)実行委員会(実行委員長:竿代照夫師)が発足しました。今後はJEAの加盟教団や団体の協力を得ながら、実

行委員会を中心に準備が進められていきます。その協力態勢は、これまでの交わりを土台としつつ、伝道会議の目的にふさわしく、より広く築かれていくことが期待されます。会議のもち方については、お互いの参加者意識をさらに高めることができるようなかたちを整えていきたいと願っています。また、すべての準備を通して次世代のリーダーたちが生みだされ、その交わりが育てられていくことも大切な目的の一つではないでしょうか。主のからだである教会の一体性が美しく保たれることによって、かしらであるキリストの御名があがめられるように祈るものです。

災害対応支援プロジェクト

[2 ページに関連記事]

JEA 活動報告(2 ページ)でも取り上げていますが、JEA 援助協力委員会は、2012 年度 JEA 事業計画の「次の大災害に備える取り組み」の一環として災害対応支援プロジェクトを推進しています。これは JEA 援助協力委員会と長年の協力関係にある米国ワールド・リリーフの資金援助によって、ハリケーン被害やハイチ大地震などで教会の災害対応を支援してきたホィートン大学人道的災害支援研究所(略称 HDI=Humanitarian Disaster Institute)との共同プロジェクトとして進められているものです。

1995 年の阪神淡路大震災の後にも、援助協力委員会による次期災害準備の取り組みがあり、その結果として、東海福音フェローシップの地震委員会や、相模原教会ネットワークの災害対応プロジェクトなどが生み出されてきていますが、今回の東日本大震災の経験を経て、さらにその必要性が高まっていると認識しています。特に、首都

圏直下大地震、南海トラフ大地震などが予測される中、日本のすべての教会が、災害時に主イエスの愛を地域に現す拠点となるように準備をすることが急務だと感じています。

具体的には、DRC ネット(東日本大震災救援キリスト者連絡会)、日本救世軍、クラッシュ・ジャパンなどと協力して、①災害対応ができる人材(チャプレン)を養成するための災害対応チャプレン・プログラム(9.11 同時多発テロの被害者カウンセリングなどの実績をもつ米国救世軍のケビン・エラズ師の情緒的・霊的ケアのプログラム)日本版の立ち上げと、②それが有効に機能するために必要な仕組み(地域教会の災害対応ネットワーク)作りを支援するツール(ホィートン大学 HDI との協力によるソーシャルネットワークサービス等)の開発を進めています。

今後の予定としては、地域教会の災害対応支援とチャプレン・プ



ログラムの日本版にフォーカスした「災害対応チャプレン・プログラム第2回フォーラム」を2012年11月19日(月)～20日(火)、OCCにて開催し、来年2月4日(月)～6日(水)に「災害対応チャプレン・プログラム日本語版・第1回トレーニング」を実施する計画です。

各教団・教会の災害対応担当者、支援団体の方々などにも加わっていただき、災害対応プロジェクトを通して、日本の諸教会、諸団体の宣教・教会協力が前進していくことを願っています。

(JEA 総主事 品川謙一)

総務局報告

- ◆2009年の第5回日本伝道会議から準備をしてきた日本青年伝道会議を主の祝福の内に開催することができました。皆様のお祈りとご協力に感謝します。集会そのものも恵まれましたが、そこに携わった次世代の先生方のネットワークが何よりの成果だと思えます。
- ◆各加盟団体への連絡にメールを使用することが多くなっています。担当者、メールアドレスなどの変更は速やかに総務局までお知らせください。
- ◆2013年度のJEA総会は、2013年6月3日(月)～5日(水)、神戸で開催される予定です。
- ◆援助協力ニュースは11月に発行する予定です。



日本福音同盟

心を一つにして福音の信仰のために力を合わせて戦い(ピリピ 1:27)

JEA ニュース 42 号 発行・日本福音同盟(JEA)
発行者・安藤能成 編集者・品川謙一
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1OCC#615
TEL: 03-3295-1765 FAX: 03-3295-1933
email: adminoffice@jeanet.org web: http://jeanet.org/